



公事根源集釋

正六拾

上

73
7083
1

公事根源集釋三冊



73
7083

社 〇
〇
〇

Handwritten notes on a slip of paper, including the characters "社" and "〇".

公事根源目錄

拾 拾 拾 拾

正月

四方洋

一日

供御節供

同日

朝賀

同日

小朝洋

同日

元日節會

同日

内侍所御供

同日

供着水

五日

供着菜

五日

子日遊

御杖

五日

二宮大饗

二日

朝觀行幸

同日

源時客

同日

視告朔

三日

御園忌

四日

能勢文庫

庫印

<2000-439>

抄本
卷五



公事根源目錄

拾
拾
拾

正月

四方洋

供御節供

小朝洋

内侍所御供

供若菜

御杖

朝觀行幸

視告朔

二 五 七 九 十一 十三 十五

一日

同日

同日

同日

上旬日

上旬日

同日

三日

二 四 六 八 十 十二 十四 十六

供御藥

朝賀

元日節會

供若水

子日遊

二宮大饗

内侍所

御園忌



同日

同日

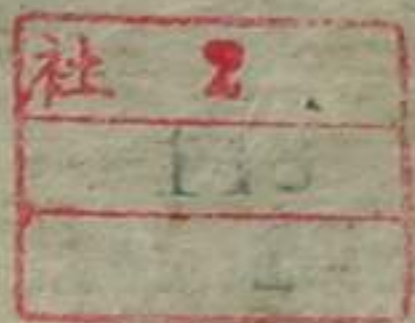
同日

五春日

二日

同日

四日



<2000-439>

一
 二
 三
 四
 五
 六
 七
 八
 九
 十
 十一
 十二
 十三
 十四
 十五
 十六
 十七
 十八
 十九
 二十
 二十一
 二十二
 二十三
 二十四
 二十五
 二十六
 二十七
 二十八
 二十九
 三十

73
0023



公事根源目錄

拾 正月

四方洋

供御席供

小朝洋

内侍所御供

供着菜

御杖

朝觀行幸

二 五 七 九 十一 十三 十五

同 同 同 同 同 同

七 叙位

五日

六 白馬節會

七日

八 御齋會

八日

九 真言院御修法

同日

十 太元帥法

同日

十一 女叙位

同日

十一 給女五祿

同日

十二 縣呂除目

十日

十二 御齋會内論義

十日

十三 獻御粥

十五日

十三 御新

同日

十四 踏哥節會

十六日

十四 射禮

十七日

十五 賭弓

十八日

十五 仁壽殿觀音供

同日

十六 内宴

二十日

十六 國忌

二十五日

十七 神祇官獻御贖物

三十日

十七 外記改始

同日

十八 書書奏

同日

十八 七瀬御被

同日

十九 火災御祭

同日

十九 代厄御祭

同日

二十 春日祭

上旬日

二十 釋奠

上旬日

二十一 園并韓神祭

上旬日

二十一 卒川祭

上旬日

二十二 祈年祭

上旬日

二十二 大原野祭

上旬日

二十三 祈年祭

四日

二十三 列見

十一日

二十四 小野御忌日

廿五日

二十四 祈年穀奉幣

廿二社二月七月
二度吉見奉元

二十五 條時仁五會

二十五 位祿定

二十六 季御讀經

二月

五十二

御燈

二日

五十三

曲水宴

同日

五十四

藥師寺寂勝會

七日

五十五

夜清水陳時祭

中十日

五十六

鎮慈祭

五十七

京官除目

五十八

東大寺授戒

四月

五十九

告朔更衣

齋院御禊
一日

六十

孟夏旬

同日

六十一

貢氷

同日

六十二

大神祭

上十日

六十三

稻荷祭

同日

六十四

山科祭

上巳日

六十五

平野祭

上旬日

六十六

松尾祭

同日

六十七

杜本祭

同日

六十八

當麻祭

同日

六十九

當宗祭

上旬日

七十

梅宮祭

同日

七十一

廣瀨純田祭

四日

七十二

擬階奏

七日

七十三

灌佛

八日

七十四

俣勢神衣祭

十四日

七十五

日吉祭

中旬日

七十六

賀茂國祭

同日

七十七

關白賀茂詣

同日

七十八

賀茂祭

中旬日

七十九

中山祭

同日

八十

吉田祭

中子日

八十一

駒牽

廿日

八十二

新日吉祭

三十日

八十三

三枝祭

五月

八十四

獻苜蒲

二日

八十五

五月節會

八十六 端午節

八十七 左右近馬場騎射

八十八 紫野今宮祭

九日

八十九 有無日

廿五日

九十 宸勝講

九十一 賑給

九十二 著鈇改

六月

九十三 御贖物

九十四 供忌火御飯

同日

九十五 供醴酒

九十六 延曆寺六月會

四日

九十七 御禮御卜

九十八 月次祭

十日

九十九 神今食

百 供解齋御粥

十二日

百一 祇園所靈會

百二 祇園條侍祭

十五日

百五 節折

百六 大被

同日

百七 鎮火祭

百八 道饗祭

同日

百九 施米

百十 雷鳴陣

百十一 廣瀨龍田祭

百十一 七日御幣供

百十三 乞巧奠

百十二 文殊會

八日

百十五 孟蘭盆

百十四 相撲

百十七 祈年穀奉幣

百十六 仁王會

百十七 八朔風俗

百十八 釋奠

上十日

八月

八事根原目録

百十九 小野祭 四日 定考 十一日

百廿一 石清水放生會 十五日 駒牽 十六日 駒牽外、近代
皆遲後、由也

百廿三 季御讀經 九月

百廿四 御燈 三日

百廿六 重陽宴 九日 不堪田養 七日

百廿八 櫻虫 十日 例幣 十一日

百三十 旬 十月

百三十一 射場始 五日 豚子餅 上亥日

百三十三 興福寺法華會 六日 雜摩會 十日

百三十五 大根申文 七日 初雪見祭 十日

百三十七 御贖物 十一日 供忌火御飯 十一日

百三十九 御曆奏 十一日 朔旦冬至 十一日

百四十一 相嘗祭 十一日 宗像祭 同日

百四十三 山科祭 十一日 平野祭 上申日

百四十五 春日祭 同日 杜本祭 同日

百四十七 當麻祭 同日 卒門祭 上酉日

百四十九 梅宮祭 同日 當宗祭 同日

百五十 當宗祭 同日

百五十一

百五十二

百五十三

百五十四

百五十五

百五十六

百五十七

百五十八

百五十九

百六十

百六十一

百六十二

百六十三

百六十四

百六十五

百六十六

百六十七

百六十八

百六十九

百七十

百七十一

百五十一 中山祭 同日 百五十二 松尾祭 同日

百五十三 大原野祭 中子日 百五十四 園并 韓神祭 中子日

百五十五 五郎 同日 丑日二点時八上西 用或下丑日用也 百五十六 鎮魂祭 中寅日

百五十七 新嘗會 中卯日 百五十八 豐明節會 中辰日

百五十九 吉田祭 中申日 百六十 日吉祭 同日

百六十一 日吉條時祭 同日 百六十二 賀茂條時祭 下酉日

十二月 百六十三 供三火御飯 一日 百六十四 大神祭 上卯日

百六十五 國忌 三日 百六十六 清體御卜奉 十日

百六十七 月波祭神今食 十日 百六十八 御佛名 十九日

百六十九 佛髮上 下午日 百七十 立之本臺子像 大寒日

百七十一 荷葉 撰者 百七十二 着鉢政

百七十三 内侍所御神樂 百七十四 御贖物 三十日

百七十五 大被 同日 百七十六 遊灘 三十日

公事根源目錄畢

公事根源八一條禪閣兼良公二十一歲時撰せラル奥書云應永二十九年正月十二日書之
 畢 偏爲頭兒也小見有禪 内大臣 又一本奥書云右根源抄依柳營御所望後成恩寺關
 白 兼良公于時 不被見一紙之書被書進之 此柳營者足利四代長得院義量也 古筆屏風
 傳云兼良公一条大政大臣從一位關白准三宮號後成恩寺也經嗣公息博聞強記無書而不
 讀讀無不通故倭漢之學識不愧古人自負才氣無歌學之師承將讀古今集慨然嘆曰一閱之
 市必立之平一卷之書必立之師況歌道之奧乎竟躋就冷泉持爲御學三代集之秘訣乃賜
 手書曰自今而可爲當家之羽翼云云其手書至今存家凡所著四書童子訓日本紀纂疏元亨
 釋書註文明一統記歌林良材花鳥餘情源氏秘訣源氏羊立源氏和字抄古今秘抄新式今案
 追加重編職原抄令抄江次第註讓位即位御櫻大嘗會和字抄公事根源抄除官雜例愚見抄
 連球合璧東齋隨筆樵談治要關藤川記雲居春筆之慰尺素往來世諺問答等此外雜著不可
 續舉今記大綱而已

公事根源

正月

四方洋

一日

公事○論語疏也篇云
 非公事未嘗至於偃之
 室也集註公事如飲射
 讀法之類
 根源○韓文備際無根
 源
 屬星唱○江家次第
 云皇上於拜屬星座端
 妨北向稱御屬星名宇
 七通是北子年貪狼星
 斗七星也 丑亥巨門星
 字司令 寅戌祿存星
 字子 酉文曲星
 字微 貞星 字衛不
 己未武曲
 星 字寅大 午年破軍星
 字持大
 山陵事延喜式諸陵寮
 式見分又本書荷前所
 參考ス
 寶祚○卓比藻林二寶

四方洋といふ事ハ元正寅此時小正
 屬星を唱へ天地四方山陵とあり
 年災を拂ひ寶祚と有り
 清涼殿乃東階乃東階乃東階
 江次第云於清涼殿東度先敷其敷長延妻
 其上立御屏風八帖大宋或四帖云云不可然往年月令之御屏風也近代無變
 江談抄第二云諸屏風等有其數所謂漢書打毬坤元錄變相圖賢聖山水
 等御屏風等之類是也隨時立之委事見裝束司記文獻
 御屏風とて免々
 拜天地之座在所拜陵座見江次第後醍醐年中行事御座皆兩面短疊也

祚帝位也。臣軌序云
長隆寶祚注易曰聖人
之大寶曰位

砌。字彙階楚
南淵大和國多武峰
近所也

天地瑞祥志。天地瑞
祥志第十二云師曠曰正
月拜日四方終日之間
有雲五穀成熟無雲為
飢也有青雲氣大熟有
疾疫赤雲氣大旱不熟
白雲氣小熟人民小不
安黑雲氣小熟多水人
民小厄黃雲氣歲大熟
人民安樂蒼白雲為小
水若小疾蒼赤為小旱
若小疾蒼黃為小吉有
上霧人民疾病也

至氣方色不名當色也
○月令廣義卷之三
生方正子二丑順
○江次第云陪膳女房
調院飯居臺盤大盛二
十坏飯二十坏大折櫃
交菓子二合給諸司女

官並六衛府大破子三
荷小折櫃交此外稱腋
菓子三十合此外稱腋
御膳自御厨子所供御
齒固具又供御藥酒等
以高坏六本獻之有餅
鏡用近江

まうけ其前よりまう本の机に設置して香華
燈をくると七ヶ人此前よりして御膳乃儀式
ありむうを殿に此侍長なりと巨四方洋
といふけるまを以て内裏仙洞折園大名家
なりともおの事なり此也此事い川好
なるともみん仁和六年正月寅此刻は天
地四方属星山陵をおの御中より多の御門
此御記よりおの事なり此也燈籠といふ
文選江賦惟岷山之遺江初發源於盤陽注陽酒酸也言發源小巖
此より皇極天皇雨露を初給して南淵乃河
三十六代
まう乃幸有て四方を洋一給られぬ事
まう乃幸有て四方を洋一給られぬ事
は是なりとまう一給られぬ事
其より属星山陵をおの御中より多の御門
天地瑞祥志といふ書小みなり

二 供御藥

同日

是元元三乃彼なり御殿にまうかこなり
と書御座小御なりて生氣乃此御
衣を以て此糸乃御を以てのよ小か
めより諸服の典侍典藥以も生氣乃此
齒固事河海抄齒固事江次第抄云齒謂人年齒也齒固者延年固齒之義也
齒固事河海抄詳也

屠蘇。閩書卷之三十一

八風俗志屠蘇酒。華陀

與魏武帝方也。四時

纂要曰屠蘇思邈。蒼名

屠絕鬼氣蘇醒人魂。

小兒引。四民月令

云正且進酒。次第當

不起以年少者起。先晉

海西。今問董勛曰俗人

正日飲酒先飲小者何

也勛曰俗云小者得歲

先酒賀之老者失歲故

後飲酒。

鬼間清涼殿。

禁秘抄云二間格。也

南間常不上有覆簾。也

之其內南北行立御厨

子置御膳具。

古今著聞集第十一云

鬼間。鑿三百澤。五ツカ。云

申ツメ。名トモ。タシカ。云。説ラレ

ラ。

東向。云。千金。云。

於東向。戸中。飲之。

後取。各目。抄云。後取。

元三御藥。除夜。藏人。定

其人。元日。四位。二日。五

位。三日。六位

交名切紙。江次第云

後取。廣一寸八

元日。分高一寸

某朝臣。六分

二日。元日。四位

某。二日。五位

三日。元日。六位

某。並用高戸

者。近代。不

必然。

公事根源

令婦為人役送。く典。物。次。才。小。令。婦。ま。い

り。て。く。薬。子。と。て。小。女。乃。い。ち。く。嫁。を。さ。る

と。と。と。と。先。く。是。以。用。新。事。を。屠。蘇。酒。小。鬼

ら。れ。じ。と。い。ふ。奉。文。あ。ま。は。其。の。小。小。女

と。撰。て。ま。の。の。ま。し。じ。ふ。な。る。く。一。以。薬。子

鬼。乃。同。し。り。す。み。く。く。一。以。几。帳。乃。と

小。さ。あ。く。女。官。典。薬。を。め。て。押。薬。と。も

い。せ。ん。小。使。く。小。主。と。座。を。た。り。治。給。く。表

の。ま。し。く。母。次。小。銀。器。よ。く。典。薬。頭。と。り。て。と

い。せ。ん。小。使。く。小。主。と。座。を。た。り。治。給。く。表

の。ま。し。く。母。次。小。銀。器。よ。く。典。薬。頭。と。り。て。と

い。せ。ん。小。使。く。小。主。と。座。を。た。り。治。給。く。表

の。ま。し。く。母。次。小。銀。器。よ。く。典。薬。頭。と。り。て。と

い。せ。ん。小。使。く。小。主。と。座。を。た。り。治。給。く。表

の。ま。し。く。母。次。小。銀。器。よ。く。典。薬。頭。と。り。て。と

い。せ。ん。小。使。く。小。主。と。座。を。た。り。治。給。く。表

の。ま。し。く。母。次。小。銀。器。よ。く。典。薬。頭。と。り。て。と

い。せ。ん。小。使。く。小。主。と。座。を。た。り。治。給。く。表

の。ま。し。く。母。次。小。銀。器。よ。く。典。薬。頭。と。り。て。と

い。せ。ん。小。使。く。小。主。と。座。を。た。り。治。給。く。表

の。ま。し。く。母。次。小。銀。器。よ。く。典。薬。頭。と。り。て。と

い。せ。ん。小。使。く。小。主。と。座。を。た。り。治。給。く。表

の。ま。し。く。母。次。小。銀。器。よ。く。典。薬。頭。と。り。て。と

い。せ。ん。小。使。く。小。主。と。座。を。た。り。治。給。く。表

の。ま。し。く。母。次。小。銀。器。よ。く。典。薬。頭。と。り。て。と

い。せ。ん。小。使。く。小。主。と。座。を。た。り。治。給。く。表

の。ま。し。く。母。次。小。銀。器。よ。く。典。薬。頭。と。り。て。と

い。せ。ん。小。使。く。小。主。と。座。を。た。り。治。給。く。表

の。ま。し。く。母。次。小。銀。器。よ。く。典。薬。頭。と。り。て。と

い。せ。ん。小。使。く。小。主。と。座。を。た。り。治。給。く。表

の。ま。し。く。母。次。小。銀。器。よ。く。典。薬。頭。と。り。て。と

い。せ。ん。小。使。く。小。主。と。座。を。た。り。治。給。く。表

の。ま。し。く。母。次。小。銀。器。よ。く。典。薬。頭。と。り。て。と

い。せ。ん。小。使。く。小。主。と。座。を。た。り。治。給。く。表

の。ま。し。く。母。次。小。銀。器。よ。く。典。薬。頭。と。り。て。と

い。せ。ん。小。使。く。小。主。と。座。を。た。り。治。給。く。表

の。ま。し。く。母。次。小。銀。器。よ。く。典。薬。頭。と。り。て。と

い。せ。ん。小。使。く。小。主。と。座。を。た。り。治。給。く。表

の。ま。し。く。母。次。小。銀。器。よ。く。典。薬。頭。と。り。て。と

い。せ。ん。小。使。く。小。主。と。座。を。た。り。治。給。く。表

の。ま。し。く。母。次。小。銀。器。よ。く。典。薬。頭。と。り。て。と

い。せ。ん。小。使。く。小。主。と。座。を。た。り。治。給。く。表

公事根源上

三

鼓ヲツヅムツ。元明

天皇八年春正月甲申朔天皇御大極殿受朝皇太子始加禮服拜朝陸奥出羽蝦夷并南島奄美夜久度感信覺球美等來朝各貢方物其儀朱雀門左右陣列鼓吹騎兵元會元日用鉦鼓自是始矣類聚國史七十一

近仗。江次第抄云近仗謂近衛次將也

檀原宮。祇傍山東南都之立冬ニ時皇居名也

日本紀見之。日本紀云見之舊事紀見之

舊事本紀五大歲辛酉正月庚辰朔宇摩志麻治命先獻天瑞赤登

亦云今木刺繞於布都主劍大神奉齋殿內即藏天璽瑞寶以爲天皇

鎮祭之時天皇龍異特甚詔曰近宿殿內矣因号足尼其足尼之号自此而始矣

同書三卷。日本書紀二十五大化二年正月甲子朔賀正禮畢即宣改新之詔

大極殿。大極殿。類聚國史七十一歲時部天平十四年春正月丁未朔百官朝賀爲大極殿未成權造四阿殿於此受朝焉石上榎井兩氏始樹楯槍。左經記云案大極殿體非寢非

公事根原止

してさけりし御即位乃儀式同同辨

なりとわりの開門なりありてめし此鼓を

らじまは群臣列して門より天子を

御座小はせ給へん兵庫寮証法より執

駢いて帳法八字小切を近仗警蹕法せ

らし書自辰番法し典儀再相法と

なり群臣此時再相の奏賀奏瑞して二人あり在

小はみく祝事也是の玄乎此月あり

奏瑞ありと團しりしを是れと記

て今日是と奏しり也其時群臣再相法し

舞踊しれん武官美歳此旗をさる也いと目

あり儀式も也神武天皇元年正月百檀

原の宮法なりしは位小はり給事なり

時宇摩志麻治命天瑞瑞奏瑞なりし日

本紀小なりしは是なりしと始なりし

又孝德天皇乃御宇大化二年正月一日御

門ありし事傳りし日本紀也

是が誠の朝拜といふなりしは小六十六代

一条院正暦より後のありし不承又記録小

と不見なりしなり大極殿もなりしは是今の

七十代後冷泉院御宇大極殿炎上

五

堂所謂楮作也諸寺金
堂皆楮作也

君子私十二。大寶殿云
大明無私照至公無私
親

小朝鮮コハシ斗トを成小コ多タ也

五 小朝鮮或ニコハシ 同日

此事の多は下コして元日コしてあは天子と
あ一奉るべきなり一禮くたし取入る公事小
て侍給コして一て初延コり為しと侍給コは神
軍佛事コも此とて侍給コは是の私乃礼也君の
初コり一云父の不言事とて延喜乃侍給コ
勅コり延喜六年より左大臣時平公小治と
當り侍給コ也侍給コは百官悉あはと
以コつても小治初なる者コなり也百官と

大連四十一季周翰注朝延天子也

六代

苗コを七給コなり也侍給コは元正乃日君代
あ一奉る事とまきり小一侍給コは同日十九
年小又とて侍給コは初乃侍給コ也其初延
喜の年小治下乃侍給コは初乃侍給コか
とも當代の皇子達に於て礼の儀式ありそ
は長子に道はあひつる御コは初乃侍給コ
侍下は侍給コは初乃侍給コは初乃侍給コ
を侍給コは初乃侍給コは初乃侍給コ
多り関白大臣以下とてまきり奉る儀とて

公事根原止

六

舞踊。拾芥中未舞踊
事再拜。置立左右左局
左右左小拜立再拜

元日節會。江次第第
元日宴會。江次第第

丙午。江次第第第一
大臣於承明門內辨備
諸事。故曰內辨第二大
臣於門外辨備諸事。故
曰外辨。

一上。職原抄云官中
事一向左大臣統領之
故云。一上。閣白之人爲
左大臣時右大臣行一
上。事是依閣白與奪也
。同下云是執柄依執
天下之政。無其假仍官
中諸公事併與奪。次大
臣之故。以次人爲一上
也。

記問諸司具不。又召外
任。奉付藏人。奉之。入仰
令候列。諸司奏。可付內
侍所。由件次。被奏。日。晚
降若諸司。中發省御曆
不具時也。中發省御曆
奏宮內省水。樣。奏。水。有
也。以下。腹。赤。奏。若。選。期
爲。寸。法。腹。赤。奏。不。參。七
日。奏。若。當。卯。且。卯。敷。奏
等也。奉。仰。仰。外。記。

七耀御曆。又。延喜式
中發省式云。兵。後。官。入
率。陰。陽。寮。入。百。建。春。門
進。七。耀。御。曆。輔。以上。一
入。留。奏。進。其。詞。日。中。發
省。奏。陰。陽。寮。供。奉。祝。某
年。七。耀。御。曆。進。良。久。申
賜。止。奏。無。勅。答。若。親。王
良。久。平。忍。美。恐。美。毛。進。禮
贊。進。良。久。平。他。皆。放。此
水。樣。江。次第。抄。云。宮

公事根原止

清涼殿乃東庭。四位六位六位。おすて神

祇法。神々。舞。端。らる。成。魚。一。さ。り。て

作。る。事。て。之。な。あ。れ。下。て。今、

程。作。乃。由。と。先。無。名。門。乃。氣。弓。陽。殿。子。立。法。ら

なり。て。上。首。乃。人。苑。人。乃。と。り。て。奏。聞。也。

之後。御。門。乃。御。なり。て。小。綱。洋。乃。儀。式。侍

なり。物。津。法。略。と。る。小。より。り。て。小。御。執。と。は

し。も。され。朝。賀。有。年。初。乃。事。を。ん。

元日節會。同日。

其儀小御執とて。おす。内。奏。乃。大。臣。陣。乃。登。亦

あ。る。事。と。り。小。御。執。と。り。て。位。次。乃。大。臣

乃。小。御。辨。小。御。執。と。り。て。職。事。と。り。り。て

作。る。事。也。大。方。乃。御。門。乃。事。法。一。の。上。乃

人。乃。人。と。り。り。て。此。乃。陳。乃。端。法

座。乃。て。苑。人。乃。御。門。乃。御。任。奏。と。り。り。て

是。法。御。執。乃。て。由。法。又。御。司。奏。乃。内。侍。亦

小。御。執。乃。て。御。奏。と。り。り。て。御。司。奏。乃。は

す。み。く。奏。乃。と。り。り。て。御。司。奏。乃。は

諸司。三。乃。物。乃。タ。テ。ミ。ツ。ラ。一。乃。白。馬。節。會。所。參。考。ス。ニ

守介等或任符未給或雖給任符本赴國或爲濟權政入京朝參預節會之時
外記注其人名事未始之前就內辨奏聞返給之時仰可候列之由

内省水樣奏主水司奏
之此司屬官内省水樣
者冰室厚薄寸法以瓦
石爲其樣奏之

内省式云凡藏冰之處
收冰多少及冰厚薄每
處具錄元日群臣未喚
之前省輔已上將本司
入奏并進水樣其詞曰

宮内省申主水司能
今年收太水合若于處
冰若干室厚若干已下
若干寸已上益自占率
若干室減自去率若干
室稜奉留事申給人太
宰府進留腹赤乃御覽
一隻長若干尺進平
申給登申

云水池風神丸所祭山
城國五所大和國一所
河内國一所近江國一
所丹波國一所

○勸修寺池山城國五
所之隨一也名所方角
砂云小野池勸修寺
池イハリ延喜御宇水池
ト云也

七曜乃御屬抄板腋赤此奏乃事也七曜

御屬と申勢省より奉給日月火の本金土

此七曜と云はるは此の事なりと云水様

之内省より奉給去年氷と云はるは

此様と今日節會の法なりと云奉給と云

なり厚さ薄さといふ程の甘法不傳なる

二海に奉りて其ためしと云はるは

乃れんと奉りてなり延喜式にも氷池風神

此祭なりと傳り氷乃れぬと云はるは聖代乃

臨氷乃れぬは凶事と云はるは氷の御祈り

大法秘法と云はるは今日もと云はるは

同出と云はるは此の事なり延喜式にも昔仁德

天皇乃御宇去十二年六月小頼回大臣云

皇子聞鶴と云はるは獵しと云はるは山小の

かり野中と云はるは是は菴と傳りし

様なりと云はるは人とはりてと云はるは

と云はるは時か法山乃わたり小傳人なりと

との坊給小氷室なりと云はるは皇子に

と云はるは氷池といふ所なりと云はるは

云と云はるは一丈の事なり堀く草伐と云はるは

云と云はるは一丈の事なり堀く草伐と云はるは

云と云はるは一丈の事なり堀く草伐と云はるは

陽殿壇上北行出自軒廊東第二間銜行到左近陣南頭謝座再拜乾向先一揖次再拜次一揖東右迴經軒廊并東階等又自南進計座程東第一間西進計座程若之雨儀於元子前兩座帶鈿人南衛行一兩步爲不令開門曹各牽劍衛八人開承明并左右衛門左右兵衛開建門關司分居內辨召舍人大舍人四人同音稱唯於承明門外云云慢外稱之云云謝座江次第抄云謝至者內辨大臣蒙昇殿著座之詔命而先致拜謝之禮也先後一揖者起居之節再拜者拜天子之意也知足院關白被命云就是天位也拜天者是拜天子之儀也

建禮門相當承明門也右腋門長樂永安門也時百官皆在門外至是命開門者令群臣放入也江次第抄云諸可昇著堂上所敷之座也引聲召之時曰敷尹江次第云內辨宣侍座又云群臣再拜謂之謝座堂上著座謝之拜也又云酒正授空盃於貫首人羣臣再拜酒正歸間起如上謂之謝酒飲酒謝之拜也粘臍倭名抄十六飯餅類粘臍餅色立成一油餅名也粘也上女庶反下音齊同鐸鐘唐韻云一畢羅二音

外辨小法長樂門乃東乃脇乃足乃大内

して乃事也今德代小の毛んき此所

子乃乃後射座此儀乃乃階儀乃

堂乃乃元子乃乃此乃乃作法進退乃内辨

乃大事乃乃家乃乃此乃乃實乃乃乃乃乃

乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃

乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃

乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃

乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃

乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃

乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃

乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃

乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃

乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃

乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃

乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃

乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃

乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃

乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃

公事原上

種内

藥名

食頃日亦在引又膳毛
寒介依衣御被賜波久
宣

宴會書仁德天皇紀
宴會書テトヨノアカリト

神武天皇御宇日本紀

神武天皇紀天皇以其
酒兵班賜軍卒

續日本紀寶龜四年正
月丁丑朔宴五位已上
於內裏賜被
御六篇云賞賜也

三種神寶

代卷下天照大神乃賜
天津彦彦火瓊瓊杵尊
八坂瓊曲玉及八咫鏡
草薙劍三種寶物

我之見カコト
○神代下

天照大神手持寶鏡投
天忍穗耳尊而祝之曰
吾兒視此寶鏡當猶視
吾可與同床共殿以為
齋鏡

公事抄

とよれありのとらるとりり宴會と書くこと
よ志あるるとりたり大と神治ら志れ
取とて作りや量り常會は限會より
神武天皇乃御宇も神治と治とへ
酒と給一車の日中紀亦乃乃乃の是か
と事法發つともいへき光仁天皇
寶龜四年は春よりいひ位と小治と海
成給ひたり今とふり此心りて事と
と事と治事と

内侍御供 同日

是の年月小治とらとれ也寛平年中小治
と此内侍とらと三種乃神意乃其一
也子平振神代乃事と天照太神此天
此懸戸成と一懸給事と時石瀬給と
神治乃神治日神乃御とら此鏡なり是
と八咫乃鏡と代成と後地神弟三代
天津彦彦火瓊瓊杵尊此河一原乃國此
と成給と天とら給一時天照太神と
治とら三種乃神寶成と河と治とと此
御鏡成の我と成とらとらとらとらと

公事抄

三

主上御冠六必充ラズル

江家次第十一云内侍所者神鏡也本與主上御同殿故院被仰云帝主冠巾子左右有穴是内侍所御同殿之時主上支不能放冠給御眠之時御冠屢落仍以稱頭華自巾子穴通御懸也

白川院の禁秘御抄云白河院御宇仰曰内侍所神鏡昔飛出欲上天而女官懸唐衣袖奉引留候此因縁女官奉守護

内裏觸穢上禁秘御觸穢時恒例供神物先例不同歟寛治八年陽明門院崩之時無沙汰有内侍所御供三月一去年内大臣織及禁中時供之今度諸社祭雖延別准彼例有供物但又被止有例

年中和氣ヲソシテ系文嘉祐本草云新汲水却邪調中下熱氣並巨飲之本草新汲水毎朝一番及ミテ水也

公事根原上

主上御冠六必充ラズル。江家次第十一云内侍所者神鏡也本與主上御同殿故院被仰云帝主冠巾子左右有穴是内侍所御同殿之時主上支不能放冠給御眠之時御冠屢落仍以稱頭華自巾子穴通御懸也。白川院の禁秘御抄云白河院御宇仰曰内侍所神鏡昔飛出欲上天而女官懸唐衣袖奉引留候此因縁女官奉守護。觸穢時恒例供神物先例不同歟寛治八年陽明門院崩之時無沙汰有内侍所御供三月一去年内大臣織及禁中時供之今度諸社祭雖延別准彼例有供物但又被止有例。年中和氣ヲソシテ系文嘉祐本草云新汲水却邪調中下熱氣並巨飲之本草新汲水毎朝一番及ミテ水也。

主上御冠六必充ラズル。江家次第十一云内侍所者神鏡也本與主上御同殿故院被仰云帝主冠巾子左右有穴是内侍所御同殿之時主上支不能放冠給御眠之時御冠屢落仍以稱頭華自巾子穴通御懸也。白川院の禁秘御抄云白河院御宇仰曰内侍所神鏡昔飛出欲上天而女官懸唐衣袖奉引留候此因縁女官奉守護。觸穢時恒例供神物先例不同歟寛治八年陽明門院崩之時無沙汰有内侍所御供三月一去年内大臣織及禁中時供之今度諸社祭雖延別准彼例有供物但又被止有例。年中和氣ヲソシテ系文嘉祐本草云新汲水却邪調中下熱氣並巨飲之本草新汲水毎朝一番及ミテ水也。

公事根原上

五

江師。大江氏太宰師也。江次第抄云江師次第云飲御若水之時有死萬歲不變水急急如律令云

後院。拾芥中末後院四町五條坊門南五條北大宮東堀川西。江次第八裏書云後院謂冷泉院朱雀院等。源氏物語若菜卷河海抄云十二種若菜

薊 苣 芥 蕨 薺 葵 蓬 水 蓼 水雲 芝 菘 此中菘松葉說下白川院松人下先之傑事也卜仰了九大外記師遠八小大根由申之其說

大外記師遠諸道兼學者歟今世尤物也能達者不劣中古之博士歟。職原大炊頭下近代大外記中原師遠子孫相傳之温職中尤膏腴也

コホ子。和名抄温菘佳由錫食經云温菘終和名古味辛大温無毒者也

正月七日。歲時記云正月七日為入日以七種菜為羹

わきなは時更毛成法あつたり江師ミヤコ通ミヤコ房御ミヤコ此次第小いああ成法の心時呪ととあふ事

九 供あ菜 上子白 内苑察なりむ小内膳司より正月より書

足清奉り色寛平年中より始まり事小也延喜十一年正月七日也後院より七種乃あ

菜と供と又て唐四子二月廿九日女御あふれ安子藤原氏師輔分女也孝部王乃記小見たり

たり若菜成十二種法事あり其くくいあかしくつる。菘アヲの。蕨アヲの。あひ。芝アヲ。蓬アヲ。

水蓼アヲ。菘アヲ。松アヲ。み。つるまけ松乃字此事白川院御河師をよ御あふりはあ松と書く

とつと清也あ此事してつとつと松所々へ奉りていひが事なりと上あ

は作の身あ常いあ菜は七種れ物也薺こあへ種芥著御アヲす。海佛は産なり

正月七日小七種乃菜アヲ成法食とれと人あ病なり又邪氣との成り御あつるとらんつ利

公事根原上

五

子日。拾芥上本云正
月子日登岳何耶傳云
正月子日登岳遠望四
方得陰陽靜氣除煩惱
之術也十節記

○扶桑略記宇多天皇
寬平八年閏正月六日
有子日宴行北野雲林
院云

○菅家文章第六廳
雲林院不勝感歎聊叙
所觀序云予亦嘗聞于
故老曰上陽子日野遊
厭老

○又曰倚松樹以摩腰
習風霜之難犯也和菜
羹而啜日期氣味之充
調也

○十訓抄云圓融院
送有仁二年此所子
日世サ給テヲ思ヒ出
行成卿カクミシク
ヲクシト常ノミキハヤキ
煙ノメテ旅ノ悲シキ出
テハナケレモ思入ル志深
クフホユ

日本紀正の日本紀三
十持統天皇三年正月
乙卯大學寮獻狀八十
枚

○卯日々々ツル杖故ツエ
上云文德實錄云剛卯杖
ト書多漢書玉恭傳中
云正月剛卯金力之利
服虔曰剛卯以正月卯
月作佩之長三寸廣一
寸四方或用玉或用金

十
子日遊

毛のじりく人かおく子日とらるるて松と
引きり也六十元 六十四元 六十五元雅院園融院三条院等これ卯時
ゆもけ卯遊いあさうしや中うも各融院
り子日と治さ七宿くうい寛和元年二月
十三日のゆ也路り程卯車也一が紫野
とく成て上皇い所馬小松くれりた衣
大信山平坊直衣して殿上人の布祕なり
極る危きまけ慢と引光くう一子遊
とわいて小松茂ひく結種らるる物
おひの松被子やうの物とやうく和奇哉
狀と其時乃布おの平道盛くも清原
允輔曾孫好忠をくし小奇人ともうてゆ
一室く極時乃奇るとい代これ集り入
行路んまきく引んかふ

持統天皇三年正月卯日大學寮より
乞成奉る中日本紀小あり又仁壽二年正月
月小徳清符祝杖と狀く物懸杖逐あり
乃小あり乞成ゆく魚鬼杖拂ふらなり

十
卯杖
卯日

十
卯杖

十
卯日

周禮。周禮春官大宗伯春見曰朝夏見曰宗秋見曰覲冬見曰遇時見曰會殷見曰同此六禮者以諸侯見王爲大漢高祖八。史記高祖本紀六年高祖五月一朝太公如家人父子禮太公家令說太公曰天無二日土無二王今高祖雖子人主也太公雖與人臣也奈何令入主拜人臣如此則威重不行後高祖朝太公擁篲迎明却行高祖大驚下扶太公太公曰帝人主也奈何以我亂天下法於是高祖乃尊太公爲太上皇心善家令高賜金五百斤

國史此國史續日本後紀也

文王世子篇云文王之爲世子朝於王季日三雞初鳴而衣服至於寢門外問內豎之御者曰今日安否何如內豎曰安文王乃喜及日中又至亦如之及暮又至亦如之

桐臺卷河海抄上達部殿上人也堂上人總名也

方り又仁のり沖門母后小如きん乃く先
冷泉院小如幸方心彼時沖門南階と
つりて勢とありてくモリキ始一事を
行も周礼表日秋日觀と凡くつり是
初觀乃心乃漢高祖のみ日小一度父乃右
公小如きんれあり人乃沖門も其ため
一も事小くそ又東文成人乃沖門
初きん乃義と元正沖門養也と二年正
月小大極殿小出沖門りて東文すこれが
里始小と後と度と法事をり又又長十

年三月小淳和沖門紫宸殿小出沖門
東文初觀乃儀とありイニ東文乃後沖衣と
東文是河名と津蘇とくまると給答
儀とあり成人也ありとく國史小注
勢り是恒貞親王の家乃時乃事とん
又王法世子とありと記王季小如とる
事日小と度なりと礼記小みとる是
つりて東文初きん始例とありと
西 陳時宮 同日
是乃攝政園白家小去乃作乃下ト

公事根原止

○大臣家大饗見江次
第二

○裏書云初任大饗於
庭行之每羊大饗於母
屋行之

朱器儀器○裏書云藤
氏長者朱器臺盤開院
左大臣冬嗣公御物在
勸學院長者初任之時
獲之正月大饗用此器
也自餘大臣大饗用赤
木黑地机樣器等

上目。日本紀三十
上日

論語。論語八佾篇云
子貢欲去告朔之餼羊
集註告朔之禮古者天
子常以季冬頒來歲十
二月之朔于諸侯諸侯
受而藏之祖廟月朔則
以特羊告廟請而行之

進部氏タキメ招引してあそむは事也定まらば

公勢カウもあそびは條時客身屋主書と申す也

方る居る母居る大饗の羊年心也とくは行

江次第入自西樓門渡庭中犬飼相具鷹飼紫纈符衣 白布袴 壺脛巾 淺履 熊行騰

餌紫纈符衣 白布袴 壺脛巾 淺履 熊行騰鳥頭紅纈 左手居鷹馬 右手執付稚枝 犬飼 帽子 紺布符衣

綱綱革袴 鬘 左手引犬 右手取白木枝草袴鬘 左手引犬 右手取白木枝

あはれり大名家の極美れ家と申すは

なり條時客もあそびは事也定まらば

江次第江次第抄先雙調安名尊席田鳥破急賀殿急次平調伊勢海更衣鷹馬子方歲樂三臺急

揚園家もあそびの事取らるる念なくは

五 視告朔 三日

是の百官禮行事と申すは事也定まらば

お天子の御説きもあそびは事也定まらば

かいと申すは事也天子大極殿小極殿なり

見給天武天皇みまは九月は雨ふり

て告朔なりと申すは事也定まらば

前小始りわし知れぬと申すは事也定まらば

あそびは事也定まらば

告朔といふ字は事也定まらば

八景根原上

この言也意あるもいふ事此事也心事
或ハ一日小宮又甲かなしなり視告御
かこそそけりおろそこと二文字小しじり
口傳してゆこくくくくくくくくくく

十六 御國忌 四月

正月四日ハ村上天皇乃母后ハ御國忌也
了唐九夜正月小御門夜筆と深く是法
華燈月夜と弘徽殿と御八後乃
儀ゆき其後法性寺と毎年小御八後
仍りて小御と事なり大御法性

國忌職負令義解謂先
皇崩且也。日本紀ニ
國忌ヲ令テ訓ス

○村上天皇醍醐天皇
第四之子女皇太后藤
原穩子昭宣公第三之
女也
○弘徽殿後醍醐院御
御文庫本點也。親範
御點之源親行說此事
猶口傳
河海抄

勸修寺和泉旗尾寺僧
弘法師也八講事見元
亨釋書勤操傳

門北掖勸孟辨少納言
相分勤與端内豎取瓶
子、裏書アリ

管文。江次第云伴管
入五位已上歷名一卷

諸同主典以上補任二
卷上武官主典已上補
任一卷令外官一卷諸
國主典以上補任一卷
上十年勞限一卷

○江次第云盛續紙二
卷於柳篋兩卷七八枚
。同云次叙一階者
姓尸某從下一姓尸某
同是殿上一階也。
石頭藏入令檢簡之後

八後乃事ハ勤操と云沙門乃桓武天皇
八人分法華八卷四日朝多二座各講一卷各法華八講
延唐十文字ハ始め多しハ不測乃八後
冬是法之也十海亦傳も同此沙門乃始
仍る心ハ世形

七 叙位 廿六日近代有

其儀大御下左仗乃座小宮く先事法性
始乃儀不小何く勸聖凡儀式ハくあり
石階壇上取取二人相對酌酒唱平擬把人揖之突左膝飲了起又酌酒畢從
唱平行之如旬儀也
正以ハ心事極くゆりより下り次小宮人
て儀ハ法めと事ハ村湯殿して儀又承く

叙

氏爵申文。江次第云
件氏爵等申文在規管
外記史依上且叙之件
申文在規管入內並一
加階叙位之間叙從下
了後令殿上辨名外記
勘文不入物進之每事
被問外記諸官給雖下
姓叙內階自餘依姓叙
內外階若有疑姓者先
叙外階後日依愁叙內
階朝外階也車持類也
異內階也非朝臣姓叙內
真人宿禰連直公縣主
忌寸首玉平源藤原橘
管原大中臣高階在原
管道已上不叙外階必
叙內階叙畢入宮奉執
政覽畢給後大辨退

衰日。拾芥下末生軍
衰日子午生。丑未生
子寅申生。巳卯酉生。辰
辰戌生。卯己亥生。寅申

公事林源一

次第より御前入座より法く圓白なりしに
執筆のふりて座小すくも法く執筆十の
常法より一續法の位を改事小叙玉源有徳乃
江次第二十葉申文被申加階之趣也 二卷二十一葉勘文可案取叙入數
氏乃爵乃所及入内一加階乃勘事なりし事なり
三十四 三十四
此十二階也今い毛一は替りし事なり
位乃おろりし事なり終りし事なり
天智天皇十三年二月小徳王位は小徳王位

天徳六年三月七日帝會乃極急なり
ととらわきりて是事なりし事なり今
みおろしき事なりし事なり今
事乃法行徳事なり
七日
此節會乃事大方い元日なりし事なり
元日乃極りし事なり

公事林源一

内道場。僧史略云内道場起於後魏而得名在平隋朝。

○文苑英華第二百二十卷論送契女法師赴内道場詩昏昏辭老夫灌頂遇醍醐御呈嬪心鏡君王賜警珠降魔頻戰否固疾敢行無深契何相必儒宗本不殊

治部省^三の延喜式女番寮式凡大元帥法每半正月起八日至十四日一七箇日於省修之

小栗栴山城より醍醐邊也。常陸傳在元亨釋書

此事亦付成如家なる人

手 真言院御修法 同日

是も今日より七日にこの方より今年 金剛

果されぬ事の胎苑果より小整く修治

後七日乃御修法とい此事なりて長

六年小弘法大師大唐乃内道場小治

真言院成文中小戸直履れ之儀如元

十一月乙未上奏 同日

治部省より七ヶ月是儀行つる苑人内務

寮の宿人儀も御衣を給く壇前より

多御衣給よ入る細り法かりて是儀

中不承しり給へ苑人封を付く是を

治部省小治よりして御衣を付く是を

結新乃貝御衣を付く是を

於也此御衣を付く是を

仁明天皇義和太子小入唐して美林寺

此先世より人小承りて此大元帥法を

はし不結法なる小く異なりも都乃

公事根原上

二箇

三升。江次第抄云東
堅以三子為東孺。按舊
傳多以紀朝臣季明阿
閉宿禰友成爲其名。中
古以來以季明定爲其
名不似尋常事也。
持統天皇御宇。日本
紀持統天皇五年春正
月癸酉朔賜親王諸臣
內親王女王內命婦等
位。

ナリ 神武天皇紀三稱
字ヲナリトヨム

少云内侍司此被官ふある如くて幼少乃
時唯松とてなりし馬ふあはく供奉とる
あまの事こ是の三子汝のり并る如くわ
三子の天子乃るありてをさし一室締
ゆるあはくわ年毎より又汝のり
本位乃位と給也是のむしよりたか
名家と相傳し紀朝臣季明とを稱する
いと如きなり事ふらう持統天皇
持統天皇正月内親王下乃位と給と仰
奉女教位乃るは然らん

三三 給女王祿

同日

東書女王之二世已下四世以上也

西廬西官記不被節會
西廬爲女王座
○江次第云賜時服王
定四百二十九人侍其
死關依次補之但改姓
爲臣之關不補其代隨
即減定額數凡賜祿女
王定二百六十二人其
隨關補代及改姓不爲
關

奉議辨史なりしむしき義昭門乃内侍
の祿乃るをて女王の祿汝給事あり者
五百廿九人女王二百六十二人と定られ
く年毎より祿汝給事とるわ女王
祿の字は書られとる王祿と斗
儀く女字汝給事とるは傳はる也
高 賚除因 十一日
賚名は外宿禰ひひしはをりは也外
官は諸國乃はさあはゆるわ年汝

藤原朝臣

皇元上云惡人。本期月
今云黃帝伐蚩尤之時
以五月十五日伐斬之
其首者上為天狗其身
伏而成地靈
夢澤橋河海抄引之

事發後とも尸海に懸ん

共 秋御粥

十五日

昔他國の事も蚩尤といふ惡人を討つる
り黃帝といふ神門といふはひくは月十六
日小室尤はひくはそれぬる首は天狗と
成るる身は地靈といふは是れ小室といふ
實の時の伐きし粥伐して海甲小室と
高くと天狗を祭るくは後東小向海澤と
ひくはつきては氣成合とぬる神に氣
成のそとといふ本儀といふは幸氏に

先ありといふ是も心ありて正月十二
日廿五中ありてうきぬ其靈魂くまら
て過海より海にひくは人成りて此
人平生粥のこはきあるあり今日是
まのきはなるといひありて此の魂のこ
けりといふも此定大といふ海 養
の時と粥と四方よりその事もいふ法
事時發るといふは海に實平といふ
年あはし是は奉給といふ三月三日行とれ
御名は色といふ時といふ同定候といふ

公事根原上

御新。雜令云凡進新之日辨官及式部兵部宮内省共檢校貯納主殿寮。

○江次第云年中所用御新諸司並五畿内國司供進見主殿寮式其數云延喜式見之。

延喜式第三十六主殿寮式年中所用御新

湯殿料一百八十荷御

匣殿御洗料七十二荷

御沐料一百八十荷御

脚水料二百四十荷御

炊料七百八荷儲料二百

百荷中宮此御誓殿五荷

乙十六日也。延喜式中

宮職式正月十六日踏

歌坂女四十六人祿料

細屯綿六百疋預請大

藏御誓殿班賜有差

光源氏物語。未摘

花コトニシテ多カキ正

初音コトニシテ多カキ

正月十五日。江次

第云正月十六日被行

由事起無所見今案正

月十五六日月明時京

中士女踏歌云見朝野

會載二十一

法粥は白穀大豆小豆ありありかきこ

其七 御新 同日

是の百官志新儀奉く之因省小おし先

奉ふ事之御新と書く見ふ御新

乙十六日

踏歌の事

ての御新と書く見ふ御新

それ乙十六日なり光源氏此物語なり

乙十六日なり光源氏此物語なり

中乃男女法多しと相しとふとめ

朝野羣載第二十一載踏歌女踏歌章句

小瀧河ありと男女わたり事なりと園

踏歌の事ありと見たりと見たり

日本紀私記云今俗曰阿良礼走師說此歌曲之終必重稱萬年阿良礼今故曰萬歲樂是古語之遺也

建禮門 ○拾芥云於建禮門被行之時不開門依裝束也

清寧天皇 ○日本紀十五清寧天皇四年九月丙子朔天皇御射殿詔百寮及海表使者射賜物各有差 ○日本紀孝德天皇九年春正月辛巳詔士大夫等大射官門內

入位にふれしれ成り給とありさるん
かりちきふか祿とく六位成しよ六位の世
てどの方としよ心もあつらふ大小のさ
行事か法備願に因よそなり踏哥弟
會といあきさしつらふと法ありた
しよ或いあきさしつらふと法ありた
しよ或いあきさしつらふと法ありた
代み初侍る冬十六日法女踏哥らんり

玉鬘卷河海抄同卷カサシワタカ松踏歌人以編造華著冠額也是号高巾子云云

射禮 十七日

見江次第

是の建礼門にて初侍る事なり代り始ふ
豊樂院にてあり十六日小先兵部省の
びといふ事ありて射を成すの
しよ儀式を正月小正月の三月も
りては三月の十日次十三日
海一清寧天皇四年九月一日小正月の
りては三月の十日次十三日
は正月小正月の天智天皇九年正月小正月
小正月の宮門の内小正月の射とあり

江次第正月為御忌月時三月行之天慶長和承延久

衛 四府 左右近衛左右兵衛

邪射禮乃... 仁德天皇
乃御宇不... 藤原...
子乃的... 藤原...
此稱的... 藤原...
人乃... 藤原...
阿り... 藤原...
奉り... 藤原...
と... 藤原...
よ... 藤原...

○裏書云賭弓大藏省進射遺算物佐度布是以此弓場殿令四府射之

禮記○禮記月令仲春之月帶以弓韞投以弓天子高禘之於

近衛院年号

罰酒 ○裏書云康治二年治左府欲行罰酒以久絶故不行云

○也弘仁二年二月十日... 賭弓... 十八日... 立次第云以射禮後朝被行
是の天子弓場殿小の... 乃仲春小弓... 乃大將射... 乃小將酒... 後大將射... 乃小將酒...

公事根原上

大將左右少參内芝事

○江次第云左右大將

申障以隨身就藏人所

當日有喚内仍參入大若

臣大將者

可遣出納

○裏書云大將必申障

故實也依不儲與良故再

三召之後參仕也

實空○元亨釋書十寬

空姓文室氏内州人事

神日爲弟子又稟寬平

上白密灌兼得圓堂院

事天曆帝勅修祈雨法

過期不雨君臣皆笑空

乃著法服捧香爐入宮

庭立焚香誦咒密觀須

臾于時陰雲忽起大雨

暴降然宮城而已不到

他所時人奇之康保元

年爲僧正天祿三年二

月六日化年八十九

二間觀音及後破幸古

神事寺内神祇

權新右子祐

無九免

陪九免

陪九免

陪九免

陪九免

陪九免

陪九免

陪九免

陪九免

陪九免

陪九免

陪九免

陪九免

陪九免

陪九免

保元平治元年正月廿一日被行内宴

文人○花宴河海抄云文人詩作人也異音ヨ

ミナハセリ是名目也ウホ物語ヲアケノ下云文人上題給テラミナラニル

いふかりふりあれどいふかた得た衣な
ま春内まぬ事とく度これる小侍とて油
あふとく又夜とる賭らとて陰時小侍と
御説とる事とるそれ殿と法侍とるも
時射侍とるなり

仁壽殿觀音供 同日

東寺院長者とる人持此事とては勤とる也

里内仁の町に真言院とて坊とる也和二子

六月十八日觀音仁像一尊法仁壽殿仁安坐とる

仁和寺 仁和寺 仁和寺 仁和寺

君村仁とて二間仁也知仁か仁れ仁と仁加仁持

阿闍梨座半疊二南間如御講之時應本

尊寄障子也 又一日

内宴とていふらとて法良會なり仁壽殿

とて木とるらとて文人も野城とるも持と

作とるらとて御おとて法とるらとて又一日也

二日廿三日の程子時目小わとるら其目小

二日廿三日の一二献乃法報王云御とるら

乃あはれとて法とるら保元小法西仁とるら

仁壽殿

仁壽殿

後の給く侍り

三十三國忌

廿六日

是鳥羽院の母后女御（鳥羽院女御也）子乃沖國忌

元子小正月（村上天皇母后御國忌前見あり）の沖國忌と捨くこれ又

日志國忌と（村上天皇母后御國忌前見あり）異なりも天子七

廟の内大祀と（村上天皇母后御國忌前見あり）昭祧祧と（村上天皇母后御國忌前見あり）儀のそまき

其外乃四廟と（村上天皇母后御國忌前見あり）儀のそまきと（村上天皇母后御國忌前見あり）殿廟と

御子の給り事此侍り也（村上天皇母后御國忌前見あり）乃沖佛事

東寺にて行り侍り也（村上天皇母后御國忌前見あり）乃沖佛事

乃沖佛事と（村上天皇母后御國忌前見あり）儀のそまきと（村上天皇母后御國忌前見あり）儀のそまき

乃沖佛事と（村上天皇母后御國忌前見あり）儀のそまきと（村上天皇母后御國忌前見あり）儀のそまき

乃沖佛事と（村上天皇母后御國忌前見あり）儀のそまきと（村上天皇母后御國忌前見あり）儀のそまき

乃沖佛事と（村上天皇母后御國忌前見あり）儀のそまきと（村上天皇母后御國忌前見あり）儀のそまき

乃沖佛事と（村上天皇母后御國忌前見あり）儀のそまきと（村上天皇母后御國忌前見あり）儀のそまき

乃沖佛事と（村上天皇母后御國忌前見あり）儀のそまきと（村上天皇母后御國忌前見あり）儀のそまき

乃沖佛事と（村上天皇母后御國忌前見あり）儀のそまきと（村上天皇母后御國忌前見あり）儀のそまき

乃沖佛事と（村上天皇母后御國忌前見あり）儀のそまきと（村上天皇母后御國忌前見あり）儀のそまき

乃沖佛事と（村上天皇母后御國忌前見あり）儀のそまきと（村上天皇母后御國忌前見あり）儀のそまき

乃沖佛事と（村上天皇母后御國忌前見あり）儀のそまきと（村上天皇母后御國忌前見あり）儀のそまき

國忌。江次第云東寺儀但雖西寺國忌東寺行之依西寺荒也

天子七廟。禮記王制云天子七廟三昭三穆與太祖之廟而七大全

朱子曰蓋太祖之廟始封之君居之昭之北廟

二世之君居之穆之北廟三世之君居之昭之

南廟四世之君居之穆之南廟五世之君居之

廟皆南向各有門堂室寢而牆宇四周焉太祖

之廟百世不遷自餘四廟則六世之後每一易

世而一遷其遷之也新主祔于其班之南廟南

廟之士遷於北廟親盡則遷其主于大廟之西

夾室而謂之祧凡廟主在本廟之室中皆東向

及其祔于太廟之室中則唯大廟東向自始而

為最尊之位羣昭之入乎此者皆列於北牖下

而南向羣穆之入乎此者皆列於南牖下而北

向南向者取其向明故謂之昭北向者取其深

遠故謂之穆蓋群廟之列則左為昭而右為穆

祫祭之位則北為昭而南為穆也又云毀廟云

者何也曰春秋傳曰壞廟之道易櫓可也改塗

可也說者以為將納新主示有所加耳非盡徹而悉去之也

昭祧穆祧。祧玉篇他

么切遠廟也

昔國忌天

智天皇崇福寺桓武天皇西寺仁明天皇東寺三行仁時凡國忌日各請當寺僧一百只轉經禮佛治部玄蕃官人詣寺布施物忌日樂業

禮記祭義註忌日親之死日也

又檀弓上忌日不樂

答杖 孝德天皇紀

廢朝廢務 禁秘抄云廢朝者諸司政如恒天子人不臨朝政廢務者諸司不政一日或三日○又云世

大事大臣費奏時有之依事淺深或五箇日或三箇日也廢朝三日被御之止音奏整攝祭中

無物音垂清涼殿御簾第四日可上御簾而當

忌日或無沙汰及數日

○古事記中卷即舉火見者既崩訖介警懼而坐殯宮更取國之大奴佐種種求生別逆別阿離清埋尿戸上通婚馬婿并婚鷄婿大婿之罪類爲國之大被

外記政始後醍醐手中行事九日云々下此比

口ヲ撰テアリ

侍人一廢朝と尸の法司に改め法司

小くけり法司の侍人とも天子の侍

朝のつぎみと改め侍人めさむ也こま

の輟りもいふ廢朝の教りもとととと

侍司を改事法と免うる也なり

三西 神祇官献御贖物 音

是の毎月乃法司なりふとととと

なる一を法とあり物に侍たりととと

ふ物といふ也人献法司と法代と

とら事ありとととととと事紀小侍

天皇の豐浦法宮小ありとととと

御あり物と法とととととと又旧事

紀は天皇命麻とととととと法代

舊事本紀七神武天皇紀天皇命更求法壞分殖好麻木綿永奉

て奉らりとととととと又毎相乃御あり物

後朱雀院乃御あり物とととととと

是の吉日とととととととととと

たへき也と御下位次乃御あり物

あり宰相應と法とととととととと

公事原上

三五 外記政始 江次第十八

六十九代

カタナレ。結政所見次第
○續後拾遺卷第十六
雜歌中

外記廳結政座子古
宮に柱れ今よ跡は
あはれまうりこは
わくまもてま

中原師光朝臣

いしへりりこれ都
大柱こりりなり
かを抄るる

南所名目抄云

在外記廳

出立園大層延文三年

正月卷云於南所門外
楯上寫了次第四位立

樹南五位立樹北

外記廳

三十一

納云外記使のさきしし事とにさし
御めしわれ冬大弁も廳へしはくし
しし事とさし南法取しし初登り
しし事とさし出さぬはれく北法あり事
しし事とさし左を陣ははく初記は恒
例法時の政とさし初官をさししし事
しは先南法改法初始しし事とさし
後北廳は改ともさししし事とさし
しし事



